



当時、SHR は市販されていませんでしたので、自分たちで繁殖して使用する必要がありますし、何よりもその種が必要になります。幸いなことに、京都大学の動物飼育室は鴨川を隔てたお隣にありますので、早速、米国留学を終えて帰国され、大活躍中の家森幸男先生に電話で SHR の分与をお願いしましたところ、快くお受け戴いたものです。昭和 50 年の暑い夏の日だったことを記憶していますが、私の自家用車で吉村先生と 2 人で家森先生の研究室を訪問しました。今でも光景が目に浮かびますが、まだ病理学教室の助手でいらしたかと存じます家森先生は白いトレパンにランニングシャツ姿で、タオルを腰につけた笑顔で出迎えて戴きました。タオルで汗を拭きながらのお出迎いで、早速に動物舎にご案内していただいて SHR を分与された次第です。暑いのでトランクではなく、車内に SHR を入れて大切に持ち帰りました。

私たちの大学の動物舎は、当時はまことに粗末なもので、病理学や解剖学のある古いビルの屋上に簡易の施設を設けたものでした。小動物から山羊などの比較的大動物まで狭い施設の中で飼育していました。それと比べると規模が大きく設備が充実した京都大学の飼育室に感激したことを記憶しています。私たちの飼育室があるビルの一階は病理学と法医学の剖検室が並んであり、その横に古びたエレベーターがありました。今では見られない手動式のもので、扉は鉄格子で、ガッシャーんと閉めることで動き始める、何とも恐ろしいエレベーターでした。さすがに、このようなエレベーターは、当時でも他には見たことがありませんでした。研究は深夜に及びますから、しばしば深夜に実験動物の搬入や搬出をするもので、薄暗くて気味悪い廊下に入って、そのエレベーターを動かし、屋上に出るのですがホルマリンの臭いが漂う廊下は非常に気味悪く、1 人で行くのが嫌で同僚を誘って行ったものです。動物実験では明確な結果が得られるものですから、その研究は楽しく、徹夜で集中して取り組んだことも良い思い出になっています。

当時の京都は、蜷川虎三知事の共産党府政で、「京都に 2 つの医学部は不要」などの発言があったように、府立医科大学へは積極的な投資が行われなかったために、校舎や設備はどんどんと古めかしくなり他大学とのコントラストが明瞭となってきたものでした。

その頃、1978 年に京都府知事選挙で自民党の林田悠紀夫氏が選ばれると、一転して府立医科大学の運営が見直されて投資がなされるようになり、他の府立病院や保健所と一体化した医療センター構想が実現したことで多くの医療資源を確保でき、飛躍的に施設と組織が拡充する基礎が築かれて参りました。河原町通りを隔てた向かいにあり、移転となった立命館大学の跡地を購入して図書館と看護学部棟を設立しただけでなく、今では、府立医科大学の附属病院、臨床および基礎研究棟などすべてが新築され巨大なビルに変身して、私が研究を始めた当時の面影は全くなりませんでした。



現在の京都府立医科大学（ホームページから転用）